

Title	補文選択の意味的考察
Author(s)	堀, 環
Citation	Osaka Literary Review. 23 P.12-P.26
Issue Date	1984-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25625
DOI	10.18910/25625
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

補文選択の意味的考察

堀 環

1. 英語において多くの動詞が不定詞、動名詞、that節の補文を目的語に取り得て、この事は [_S] という下位範疇化で示される。しかし、ある動詞が共起しうる補文のタイプを予測するには、動詞や補文の意味を考慮しなければならない。補文の選択に関係する意味的要素の幾つかは既に指摘されているが、それらは部分的で不十分である。本稿では動詞や補文の意味的特徴や話者の態度という語用論的特徴を調べることによって、補文のタイプの選択に対するより完全な説明を試みようとする。

まず次章では、統語的分析の限界を指摘し、過去における意味的分析に触れる。3章では補文を目的語に取る動詞の意味的分類と、その分類と補文のタイプの関係を明らかにし、更に4章では、補文の選択に影響を与える語用論的要因について考察したい。

2. 代表的な統語的分析には、Rosenbaum (1967) Bresnan (1979) Chomsky (1981) Grimshaw (1979) がある。

補文の選択を Rosenbaum は規則への素性で、Bresnan, Chomsky などは下位範疇化でもって表わしているが、どの分析にせよ autonomous syntax の立場では、ある動詞の取る補文の種類は、その動詞に特異な性質として捉えられている。これは意味が統語的構造に影響を与えないとする autonomous syntax の考えの当然の結果である。

Grimshaw (1979) は、これに対し、補文の選択には、述語と補文の統語的範疇の間の制限を示す下位範疇化と、意味的タイプの制限を示す意味選択と、述語と補文が意味的に相容れるか否かの三要素が関係している事、そしてこのうち前の二者は各動詞に特異なもので、もし補文の選択の予測

が可能であるとすれば、それは動詞、補文の意味的考察を通してであろうという事を指摘している。実際、このような意味的観点からの補文選択の研究が幾つか為されてきている。The Kiparskys (1970) Menzel (1975) Ney (1981) などがあるが、補文だけでなく動詞の意味も考慮に入れている The Kiparskys と Ney を取り上げる。

The Kiparskys (1970) では補文タイプの選択に関係する意味的要因として、factive/nonfactive, emotive/nonemotive を上げている。前者は補文が真であるという話者による前提の有無により、後者は述語が主観的感情的評価的態度を表わすかどうかという基準により分類され、補文の種類との関係については、factive は that 節又は動名詞で表わされ、不定詞を取り得るのは nonfactive の述語のみであり、nonfactive emotive のみが for-to の形を取り得ると述べている。

Ney (1981) は動名詞と不定詞の違いを [+/-Actuality], [+/-Durative] という2種類の意味素性で説明している。埋め込み文の動詞の表わす行為を否定する文を付け加えた時、矛盾すれば [+Actuality], 矛盾しなければ [-Actuality] とし、補文が持続性のある行為を表わしている時は [+Durative], そうでない時は [-Durative] とする。これらの素性と統語的な形式との関係は(1)のように表わされる。

- (1) a. [+Durative] → Gerund
 b. [-Durative] → Infinitive
 c. [+Actuality] → Gerund / if not [-Durative]
 d. [-Actuality] → Infinitive / if not [+Durative]

これらにおいて、The Kiparskys では nonfactive について詳しく調べられておらず、Ney では [+Durative] の定義が明確でないなどの疑問点が残るが、両者とも補文選択に関係する重要な意味の特性を上げている。そこで次章では、動名詞, that節, 不定詞を目的語に取る動詞全般に渡って、

補文、動詞の意味と補文選択の関係を探してみたい!)

3. 補文を目的語として取る動詞は動詞自体の意味と動詞が補文に要求する意味により14に分類される。(Table 1)

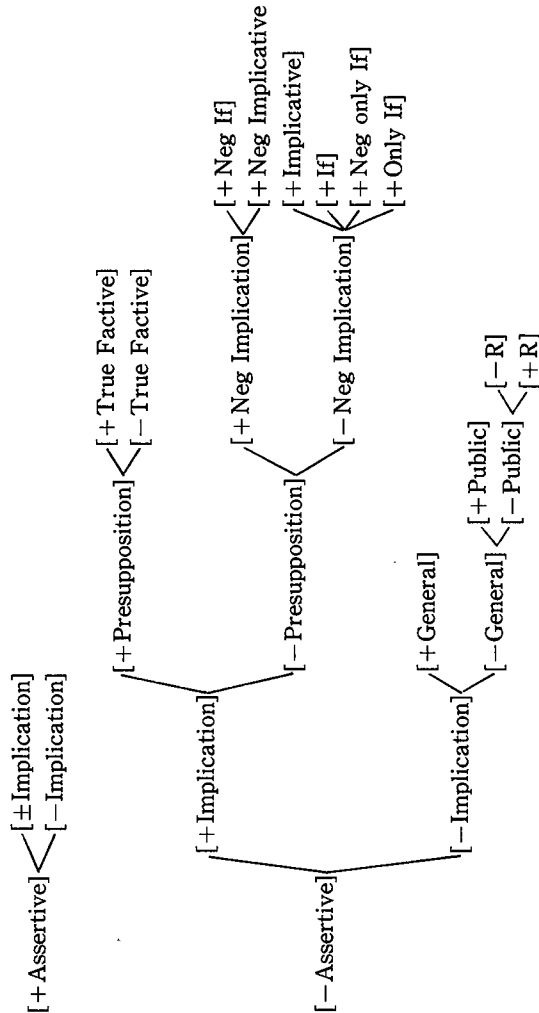


Table 1

3.1 [+/-Assertive] と [+/-Implication]

Hooper (1975) の概念に基く assertive/nonassertive

そして Karttunen (1971) の概念に基く *implicative verb* であるか否かという点から4つに分類する。Hooper は *that* 節を主語、目的語にとる述語に関して分類を行っており、補文を前置して(2)のように挿入的な読みが可能なら *assertive*, (3)のように不可能なら *nonassertive* となる。

- (2) You are very brave, she thinks.
 (3) *I posted the letter, I forget.

このように *that* 節に関して *assertive/nonassertive* の区別をしているが、この区別の基準を *that* 節のみではなく、動名詞または不定詞のみをとる述語にも当てはめてみると、当然の事ながら、これらを前置して挿入的な読みにする事は(4)の様には不可能である。そこでこれらも

- (4) a. *Skiing, he enjoys.
 b. *(To) go swimming, I wanted.

nonassertive に含める。従って [-*Assertive*] は、埋め込み文の命題を主張に出来ない物と、元から埋め込み文が命題を含んでいないと考えられるものの両方を含むことになる。

Hooper はまた、*assertive/nonassertive* の分類は *factive/nonfactive* の分類と交差する物として設定しているが、ここでは前提ほど制限が強くない含意の有無により [+/-*Implication*] に分ける。補文を取る動詞を肯定、否定することにより補文に表現されている行為や命題が真または偽であるという含意が生じていれば [+*Implication*]、生じていなければ [-*Implication*] となる。含意が生じているかどうかをテストするには、主文の動詞が肯定否定時の各々に補文に表わされている行為を否定、肯定する文を文末に続けて、4つの場合のどれにも矛盾が起こらない(5)のような場合は [-*Implication*]、どれかひとつでも矛盾が起こる(6)のような場合 [+*Implication*] となる。

- (5) a. They forced the president to resign, and at last he tendered his resignation.

- b. They forced the President to resign, but he did not resign.
- c. They didn't force the President to resign, but he tendered his resignation.
- d. They didn't force the President to resign, so he did not resign.

(6) *They avoided meeting her, but they met her.

3.2 [+Assertive]

[+Assertive][−Implication] と [+Assertive][±Implication] はそれぞれ Hooper の assertive nonfactive と assertive factive に当たる。

まず, [+Assertive][−Implication] であるが, 例えば(2)で [+Assertive] とわかった think について, 含意の有無を調べると, (7)のようにいかなる含意も生じず [−Implication] となる。

- (7) a. She thinks that you are brave, and you are really so.
- b. She thinks that you are brave, but in fact, you are not so.
- c. She does not think that you are brave, and you are really a coward.
- d. She does not think that you are brave, but in fact, you are brave.

このタイプに属する動詞は主に 'think' 'say' 'prove' 'recognize' のいずれかの意味を含むもの。例えば calculate, believe, estimate, allege, emphasize, show, warrant, certify, grant, accept がある。

[+Assertive][±Implication] は Hooper のいう assertive factive つまり Karttunen による semifactive にあたる。semifactive は true factive とは違って (8a) のような前提を消す文を作り得る。

- (8) a. It is possible that he will notice that I have told a lie.
- b. It is possible that he will regret that he has told a lie.

true factive の b とは違って a では補文の内容は前提とはなっておらず, 真か偽か明らかでない。この他, 疑問形にしたとき疑問が主文に掛かる読

みと補文にまで及ぶ読みの両方が可能である事や、補文を前置して補文を主主張とすることが出来るなどの特徴がある。

従って semifactive の動詞は [+Assertive] ではあるが、補文の命題が真であるという含意は状況により有る時と無い時がある。この事を表すために semifactive の動詞には [+Assertive] [±Implication] の素性を与える。このタイプに属する動詞は基本的には 'know' の意味を持つ?)

3.3 [-Assertive] [+Implication]

このクラスの物は(9)のように補文の前置が不可能であり、補文に表わされている命題の真偽値に対して、または行為が為されたか否かに関する話者の何らかの含意がある。

- (9) a. She managed to go to the party.
 b. *(To) go to the party, she managed.
 c. *She managed to go to the party, but she didn't go to the party.

しかし、ある物は補文の内容が真または偽だと含意されているにとどまらず、前提となっているものがある。これらを [+Presupposition] とし The Kiparskys (1970) に従って、次の性質を持つ。(10)(11)のように補文の命題が真または偽であるという前提が、主文を否定、疑問、命令文にしても保持されるという性質である。

- (10) a. He does not regret that he was idle in his youth.
 b. Does he regret that he was idle in his youth?
 c. Don't regret that you were idle in your youth.
- (11) a. He does not pretend that he is innocent.
 b. Does he pretend that he is innocent?
 c. Pretend that you are innocent.

(10)のように真の前提のあるものは Karttunen の用語を使い、[+True Factive] とし、regret resent などの感情や criticize denounce など評価を表

わす動詞を含み, (11)のように偽の前提のある counterfactive の動詞には [-True Factive] の素性を与え, 'pretend' の意味を持つ動詞がこれに属する。

3.4 [-Assertive] [+Implication] [-Presupposition]

このタイプの動詞の場合は, 補文の内容の真偽値に対して前提はないが, 何らかの含意がある。含意の生じ方により動詞を分類した Karttunen (1971) の考え方に従ってこのタイプの動詞の分類を考えてみる。主文の動詞を肯定または否定にした時の含意の生じ方の組み合わせは次の9つである。T は真の含意, F は偽の含意, O は含意のない事を示す。補文の

(12)		a	b	c	d	e	f	g	h	i
	Affirmative	T	T	T	F	F	F	O	O	O
	Negative	F	O	T	T	O	F	T	F	O

内容を否定する節を付け加えた時, 矛盾すれば補文の内容は真だと含意されており, 肯定する節を付け加えた時, 矛盾すれば偽という含意があることになる。

これら9つのうち, c と f は [+Presupposition], i は [-Implication] であり, その他の場合は, Karttunen の用語を借りて, a... [+Implicative] (eg. manage, bother), b... [+If] (lead, cause), d... [+Neg Implicative] (neglect, omit), e... [+Neg If] (escape, avoid), g... [+Neg Only If] (hesitate), h... [+Only If] (enable, empower) とする。

[-Assertive] [+Implication] [-Presupposition] の動詞のクラス分けと補文の統語的特徴との関係を見ると, d と e のみが動名詞を取りえて, 他は不定詞を取る。この共通性を捉えるため, a b g h は [-Neg Implication], d e は [+Neg Implication] という素性を共有すると考える。

3.4 [-Assertive] [-Implication]

このクラスの動詞は補文に表現されている出来事が時間軸上のある点に固定可能か否か, 補文の主語のコントロールが必要か不必要かによって4つに分かれる。

want も dislike もこのクラスに属するが, want は(13)のように時を表わす副詞を取れるのに対し, dislike は(14)のように取り得ない。

- (13) a. He wants to go to the movies tomorrow.
 b. He wanted to go to the movies yesterday.
- (14) a. *He dislikes going to the movies tomorrow.
 b. *He disliked going to the movies yesterday.

そこで, want のようにある時点に定められた出来事を表わしている補文をとるものには, [-General], dislike のように決まった時点には固定されない出来事を補文にとるものには, [+General] という素性を与える。

[-General] に属するものを更に調べると, 補文の主語が主文の主語または目的語と同じでコントロールされていなければならないものと, 一般的な人の they や話者も含めた we となり得るものに分類される。前者には want, plan, offer, allow などが, 後者には require, mean, suggest, imagine などが含まれ, それぞれ [-Public], [+Public] という素性を与える。

前者, [-Assertive] [-Implication] [-General] [-Public] の動詞は, すべて不定詞をとるが, その中で(15)(16)のような依頼, 要求, 願望, 約束を表現しているもののほとんどは modal を含む that 節をとり得る³⁾ これらの意味を持つ動詞は [+R], それ以外は [-R] という素性を持つとする。

- (15) a. I expect to meet you again.
 b. I expect that I shall meet you again.
- (16) a. He promised (me) to tell the truth.
 b. He promised (me) that he would tell the truth.

3.5 動詞の意味素性と補文のタイプの関係

Table 1 のように14のクラスに動詞は分類されたわけだが, 一部の素性はそのひとつ上の素性を含意するので, 各クラスともすべての素性を動詞に与える必要はない。そこで Rule 1 という余剰規則を設定し, 各クラス

の動詞には(17)の素性を与える。

Rule 1

1. [+ True Factive] → [+ Presupposition]
2. [+ Presupposition] → [+ Implication]
3. $\left. \begin{array}{l} [+ Implicative] \\ [+ If] \\ [+ Neg Implicative] \\ [+ Neg Only If] \\ [+ Only If] \\ [+ Neg If] \end{array} \right\} \rightarrow [+ Implication] [- Presupposition]$
4. $\left\{ \begin{array}{l} [+ Neg If] \\ [+ Neg Implicative] \end{array} \right\} \rightarrow [+ Neg Implication]$
5. $\left\{ \begin{array}{l} [+ Implicative] \\ [+ If] \\ [+ Neg Only If] \\ [+ Only If] \end{array} \right\} \rightarrow [- Neg Implication]$
6. [+ General] → [- Implication]

- (17)
1. [+ Assertive] [\pm Implication]
 2. [+ Assertive] [- Implication]
 3. [- Assertive] [+ True Factive]
 4. [- Assertive] [+ Presupposition] [- True Factive]
 5. [- Assertive] [+ Neg If]
 6. [- Assertive] [+ Implicative]
 7. [- Assertive] [+ If]
 8. [- Assertive] [+ Neg Implicative]
 9. [- Assertive] [+ Neg Only If]
 10. [- Assertive] [+ Only If]
 11. [- Assertive] [+ General]
 12. [- Assertive] [- Implication] [- General] [+ Public]
 13. [- Assertive] [- Implication] [- General] [- Public] [- R]
 14. [- Assertive] [- Implication] [- General] [- Public] [+ R]

動詞のこれらの意味的特徴と共起しうる補文の統語的特徴との関係を調べてみると、動詞のクラスと統語的な形との関係は一対一対応ではない。

そこで4章では、話者の態度という語用論的要因を考慮に入れて補文選択を考察してみたい。

4. that 節と不定詞を区別する語用論的要因についての考察として、Borkin (1973) と Riddle (1975) の研究がある。

Borkin は that 節, to be, to be 削除の順で「経験の直接性」が増すと述べている。例えば(18)において補文の中の内容は外部の調査により客観的に真偽値が決定できるので that 節が選ばれる。

(18) I bet that if you look in the files, you'll find

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{that she is Mexican} \\ \text{? her to be Mexican} \\ \text{*her Mexican.} \end{array} \right\}$$

Riddle もこれと似た考察を行い、不定詞の方が that 節よりも主語と述部の関係がより密接だと述べている。例えば(19)において a は彼女自身の調査でもってその法則が誤りだと指摘しているのに対し、b は他人の調査や本などから法則の誤っている事を示している時に用いられる。また、(20)では a は b よりも依頼者と依頼を受ける側の関係が親密である。

- (19) a. She showed the theorem to be false.
b. She showed that the theorem was false.

- (20) a. Jane asked him to leave.
b. Jane asked that he leave.

これらの指摘は動詞の意味的分類の中で that 節と不定詞の両方が対応するクラスにおいて、どちらが選択されるかを決定する時に重要であると思われる。つまり、このようなクラスの動詞において話者が主文の主語と補文に表わされている内容との関係が客観的、間接的であると思う時に that 節が選ばれ、主観的、直接的であると思う時に不定詞が選ばれると言える。⁴⁾

これを表わすのに [[+/-Direct]] という語用論的素性を設け、話者が文を述べる時に文全体にこの素性が与えられると思われる。[[+Direct]] が、与えられると不定詞に、[[-Direct]] が与えられると that 節になる。

次に動名詞と that 節の違いであるが、動名詞は Ross (1973) の名詞らしさの観察では、文性が半分弱であり、名詞性がやや高くなっている。that 節と動名詞の違いによって起こる効果として考えられるのは、その統語的特徴から that 節は主部と述部が同等の重要性を持つのに対し、動名詞では、述部に重みがあり、つまり描写されている状態、行為にスポットが当たっており、その主部に表わされているものは、所有格であり、述部を修飾する付随的要素となっている。

動名詞のこのような特徴でもって Ross の上げた幾つかの非文を説明できる。例えば (21b) (22b) が非文となるのは、主語つまり動作主を付随的要素として所有格で表わすには意味を担い過ぎているからである。

- (21) a. That many people are willing to leave is surprising.
 b. ??Many people's being willing to leave is surprising.
- (22) a. That no children refuse our offer is surprising.
 b. *No children's refusing our offer is surprising.

この考え方をを用いて [-Assertive] [+True Factive] の動詞における動名詞と that 節の選択に対する説明が出来る。数人の native speaker は(23)において話者が聴者を助けることが出来ないという事を知らせる時に a を用い、聴者が話者が彼を助ける事が出来ないことを知っていると言者が仮定し、残念な気持を表わす時に b を用いる傾向にあると指摘している。

- (23) a. I regret that I am unable to help you.
 b. I regret being unable to help you.

a の補文の内容は新情報であるので命題を完全な形で表わす that 節が、b の方は旧情報なので、それ程明確に述べられる必要がなく、動名詞で表わされる。この違いを示すために、更に [[+/-Known]] という2つの語

用論的素性を設ける。[[+/-Known]] はそれぞれ、話者が聴者がすでに補文の内容を知っていると仮定している場合と、知らないと仮定している場合を示し、[[+Known]] が与えられると動名詞に [[-Known]] が与えられると that 節となる。

これら4つの語用論的素性を設けた結果、動詞の意味素性、及び話者により与えられる語用論的素性と補文のタイプの関係は Rule II のようになる⁵⁾

Rule II

semantic features		pragmatic features	complement types
1. [+Assertive] [±Implication]	A →	∅	→ <u>that</u>
	B →	[[- Direct]]	→ <u>that</u>
		[[+ Direct]]	→ <u>Inf</u>
2. [+Assertive] [-Implication]	A →	∅	→ <u>that</u>
	B →	[[- Direct]]	→ <u>that</u>
		[[+ Direct]]	→ <u>Inf</u>
3. [-Assertive] [+True Factive]	A →	∅	→ Ger
	B →	[[+ Known]]	→ Ger
		[[- Known]]	→ <u>that</u>
4. [-Assertive] [+Presupposition] [-True Factive]		[[- Direct]]	→ <u>that</u>
		[[+ Direct]]	→ <u>Inf</u>
5. [-Assertive] [+Neg If]	→	∅	→ Ger
6. [-Assertive] [+Neg Implication]	→	?	→ Inf, Ger
7. [-Assertive] [-Neg Implication]	→	∅	→ Inf
8. [-Assertive] [+General]	→	∅	→ Ger
9. [-Assertive] [-Implication] [-General] [+Public]	→	?	→ Ger, <u>that</u> (Inf)
10. [-Assertive] [-Implication] [-General] [-Public] [-R]	→	∅	→ Inf
11. [-Assertive] [-Implication] [-General] [-Public] [+R]		[[- Direct]]	→ <u>that</u>
		[[+ Direct]]	→ <u>Inf</u>

5. 本稿では, that 節, 動名詞, 不定詞を目的語にとる動詞について, どのタイプの補文が選択されるかを動詞と動詞が補文に要求する意味, 及び話者の態度により説明しようとした。この規則では説明不可能な [-Assertive] [-Implication] [-General] [+Public] や [-Assertive] [-Neg Implicative] に関しては他の語用論的特徴を調べる必要があるし, また, try, deny, permit, fail などの例外もあり, 更に細かい分析が必要である。

ここでは, 意味的特徴が統語的な形式に影響を与えることになる。意味が常に統語的現象に影響を与えているのでは決してないが, 意味的な考察をすることにより, 統語的分析では得られない興味深い結果が得られる事があると言える。

注

- 1) Hornby の *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 中の補文を取る動詞を資料とした。
- 2) cf. Hooper (1975:117)
- 3) want は that 節をとれない。
- 4) cf. Postal (1974), Stever (1977)
- 5) 但し, ここでは begin, finish, cease などの相を表わす動詞はこの規則から除く。これらの動詞における補文の選択は動詞とは独立した補文の意味により決定されると思われる。

APPENDIX

[+Assertive] [±Implication] A

appreciate	ascertain	comprehend	grasp
learn	notice	realize	see

[+Assertive] [±Implication] B

discover	find	know	observe
perceive	proclaim	reveal	

[+Assertive] [-Implication] A

calculate	conclude	affirm	allege
imply	<u>report</u>	say	accept

[+ Assertive] [− Implication] B			
believe	estimate	judge	assert
declare	prove	<u>acknowledge</u>	recognize
[− Assertive] [+ True Factive] A			
countenance	criticize	defend	endorse
evaluate	glorify	praise	value
[− Assertive] [+ True Factive] B			
<u>acknowledge</u>	deplore	<u>forget</u>	regret
<u>remember</u>	repent	<u>report</u>	resent
[− Assertive] [+ Presupposition] [− True Factive]			
affect	feign	pretend	
[− Assertive] [+ Neg If]			
avoid	escape	evade	<u>fail</u>
hinder	impede	miss	shun
[− Assertive] [+ Neg Implicative]			
forget	neglect	omit	
[− Assertive] [+ Implicative]			
bother	dare	manage	pester
trouble	venture		
[− Assertive] [+ If]			
cause	compel	force	help
impel	induce	lead	move
[− Assertive] [+ Only If]			
empower	enable	<u>teach</u>	
[− Assertive] [+ Neg Only If]			
hesitate			
[− Assertive] [+ General]			
adore	dislike	enjoy	relish
cannot stand	tolerate		
[− Assertive] [− Implication] [− General] [+ Public]			
fancy	mean	propose	require
suggest	urge		
[− Assertive] [− Implication] [− General] [− Public] [− R]			
like	choose	offer	plan
allow	embolden	prompt	tempt
[− Assertive] [− Implication] [− General] [− Public] [+ R]			
order	promise	ask	beseech
demand	request	desire	wish

下線の動詞は2つ以上のクラスに属するか又は例外となるものである。

参考文献

- Borkin, A. (1973) "To be and not to be," *CLS*, 9.
- Bresnan, A. (1979) *Theory of Complementation in English Syntax*. New York and London: Garland Publishing Inc.
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in Jacobs, R. A. and P. S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass: Blaisdell.
- (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Grimshaw, J. (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry*, 10.
- Hooper, J. B. (1975) "On Assertive Predicates," in Kimball, J. (ed.), *Syntax and Semantics Vol. 4*. New York: Academic Press.
- Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.
- Karttunen, L. (1971) "Implicative Verbs," *Language*, 47.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky. (1970) "Fact," in Bierwisch, M. E. and K. E. Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton.
- Menzel P. (1975) *Semantics and Syntax in Complementation*. The Hague: Mouton.
- Ney, J. W. (1981) *Semantic Structures for the Syntax of the Auxiliaries and Complements in English*. The Hague: Mouton.
- Postal, P. M. (1974) *On Raising: One rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. Cambridge, Mass: M. I. T. Press.
- Riddle, E. (1975) "Some Pragmatic Conditions on Complementizer Choice," *CLS*, 11.
- Rosenbaum, P. (1967) *The Grammar of English Predicate Constructions*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press
- Stever, S. B. (1977) "Raising, Meaning and Conversational Implicature," *CLS*, 13.